

イベント通じて 地域を活性化

鳥取東高校 (2年) 福井 晴日 さん

地域の居場所づくりと街のコミュニティ活性化に向け、経験値を積む。原動力はイベント運営で高まった「もっと地元のために」という思いだ。

兵庫県新温泉町出身。活動のきっかけは中学生の時に、湯村温泉街の整備などに取り組む「湯村の街なみを検討する会」で同温泉街を流れる春來川を舞台に、親子で楽しめるイベントなどを企画する「川遊び班」への参加だった。

敬遠されがちな川遊びだが、魚釣りや水遊びではしゃぐ子どもたちの姿を見て、「身近に自然と親しめる場所があったんだ」と再認識。毎年運営に携わるようになると、地元への愛着



は強くなった。

2023年12月には「子どもたちの心の拠り所になれば」と地域の「先輩、たちと協力し「湯塾」を開設。「ビザ作り」や「お絵描き」体験を実施し、昨年の夏休み時期には宿題のサポート役も買って出た。目標は「川遊びイベントをより良くしていくことと、子どもたちの居場所をつくること」。勉学に励み知識を増やし、今後も全力で貢献する。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



祭り盛り上げ 地元へ貢献

鳥取西高校 (2年) 藤原 大和 さん

地元鳥取に貢献したいと、鳥取西高で「鳥取しゃんしゃん祭」の踊り子連を立ち上げた。親や教員、仲間の応援や支えがあり、2024年夏、鳥取の夜に鮮やかな傘の花を咲かせた。



幼稚園から小学6年まで、毎年同祭に踊り子として参加し、地元愛が育まれた。高校入学後、「同高の踊り子連を作りたい」と考えるようになり、母の後押しもあって2年春から始動。教員の支援や県からの補助も受け、約50人の有志を集めて「鳥取西高連」を結成した。

2カ月半にわたった週2回の練習は楽しく、強豪連による指導や他校との合同練習は刺激になった。大変だった

のは、法被の発注や山車の準備。美術部所属の仲間がデザインを、システム関係に強い仲間がデータのやり取りを担当するなど、それぞれの得意分野を持ち寄って制作した。来年度は受験勉強に加えて生徒会長の仕事で忙しくなるため、同連の活動は後輩に託すつもりだ。「自分の一言で、たくさんの人が動いてくれた。口に出してみることが夢の実現につながるのかも」

輝く高校生・高専生 インタビュー

勉強、部活、地域活動、趣味などで、自ら立てた夢や目標に向かって努力する高校生・高専生を紹介します。



資格取得も部活も 全力疾走

たなか も え
鳥取湖陵高校 (2年) 田中 萌笑 さん

吟詠剣詩舞にバスケットボール、二つの部活動を掛け持ちしながら、それぞれの目標に向かってひた走る。さまざまな資格取得にも挑戦しており、何事にも努力を惜しまない。



吟詠剣詩舞部に入部したのは、剣や扇子を持って舞う姿にひかれたから。最初は3人だけの小さな部だったが、現在は5人で活動し、全国高等学校総合文化祭にも出場。全国レベルの舞を見て、刺激を受けた。

バスケットボールは小学校から続けており、目標は県大会でベスト8を超えることだ。吟詠剣詩舞部の練習後にバスケの練習に参加することもある。

多忙な日々の中で、資格取得に向けて勉強にも励む。「全国高等学校家庭科被服製作技術検定」の2級などを取得しようと頑張っており、「息抜きは友人と遊ぶこと」と笑う。

「部活や勉強に打ち込む時間も、友人と過ごす時間も、自分にとってはどれも大切な時間」とキッパリ。目標に向かって一歩一歩、全力で取り組む前向きな姿勢が「今」を輝かせる。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



「地産地笑」で 海の課題解決

やまもと ゆずか
青谷高校 (2年) 山本 柚花 さん

「地元の海の豊かさを未来につなげたい」。海岸清掃と地引き網をセットにしたイベントを展開するなど、仲間と一緒に海の環境保全に向き合っている。



ポスター制作や活動発表などを通じ、海の課題解決を競う「うみばす甲子園2023」(海洋連盟主催)で決勝に進み、特別賞を受賞した5人組の一員。受賞を機に、地元の海を守る活動を続けていこうと24年春に結成した「ソーシャルアクション同好会」(13人)の部長を務める。

24年秋には船磯海岸で同好会主催の「とっとり環境地引き網」を開いた。地元小学生らに声をかけ、ボランティア

を含め230人が参加。拾った海岸ごみは138袋分にも上った。「マイクロプラスチックなど海に漂うごみが、海の生き物たちを苦しめている。大勢の人たちに海の現状を知ってもらうきっかけになった」と振り返る。

地引き網を楽しむ子どもたちの表情が目にと焼き付いている。来年度以降も、参加者が笑顔になれるイベントの継続を考える。

仲間とともに 全国大会へ

なかざわ か ほ
鳥取商業高校 (2年) 中澤 花帆 さん

ローイングを高校から始め、2024年は国民スポーツ大会に県選抜の一員として出場。25年は高校の仲間とインターハイ、国スポの出場を目指して、日々のトレーニングに汗を流す。



ローイングとの出会いは、高校入学時に部活動紹介で動画を見たこと。水面を滑るように進むボートの格好良さに魅せられ、入部を決めた。

中学時代は美術部で、運動経験は小学高学年のときに水泳をしていた程度。入部当初は週5日の練習に付いていくことに必死で、エルゴマシーンやトレーニング器具で体力と筋力を鍛えた。

初の全国舞台となった国スポは鳥取東、米子南、境の選手とチームを組み、かじ付き4人スカルに出場。ボートの方向を定めるかじを取って漕ぎ手に指示を出すコックスを担当し、準決勝まで進むことができた。

「ボートに乗る仲間とオールが合ったときのスピード感がローイングの魅力。全国を経験したことで、今まで以上にローイングの楽しさを感じている」と話す。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



インターハイで 勝ち進む

もり た ゆい か
鳥取工業高校 (2年) 森田 結華 さん

フェンシングを始めて1年あまりでフルーレ、サーブルの2種目でインターハイに出場。2025年は全国大会でさらなる飛躍を期し、課題と考えるフットワークを鍛える。



24年のインターハイはサーブルで予選リーグを突破。トーナメント1回戦は足が思うように動かず、静岡県の実験に敗れた。

フェンシングは3分3セットで、15点を先取するスポーツ。攻守が目まぐるしく入れ替わる中で瞬時の動きが勝敗を左右するため、試合を想定して日々のトレーニングで課題の克服に励む。

「初めての全国大会で得たのは、高い緊張感の中で試合が経験できたこと」。インターハイ以降は試合で緊張することが少なくなり、同年11月の県高校新人大会ではフルーレ、エペの2種目を制して自信を深めた。

「25年はインターハイでトーナメント2回戦を突破したい」。自他ともに認める向上心が高く、負けず嫌いな性格を武器に、目標に向かって剣を握る。

智頭町産の木を 製品に

しまだ かずま
智頭農林高校 (2年) 鳶田 一磨 さん

父の影響でもの作りに興味を持ち、智頭町の魅力を生かした木材加工の道を志す。基礎的な技を学びながら、生徒会活動や地域貢献など幅広く力を入れている。



木材加工との出会いは幼少期。もの作りが得意な父が作る作品に触れたことがきっかけだった。ゼロからものを作る父の背中がかっこよく、父が作る作品や道具に触れていくうちに自然とものづくりに興味を持ち始めた。

森林科学科、木材加工コースでは、自ら会得した基本技術の修練を確認するため、国家資格の「技能検定」や「若年者ものづくり競技会」などにも挑戦。また、生徒会長とし

て生徒みんなが楽しく学校生活を送れるように、生徒会行事の運営を行う一方、地域との関わりを持つため、町内の図書館や保育園で清掃活動も行う。

日本の有名林業地「杉のまち智頭町」では、近年、林業の担い手不足が問題視されている。智頭町産の魅力を生かした木材加工の仕事に就くことを目指し、木の温もりや優しさを伝える製品作りに日々まい進している。

国内最高峰 レース出場へ

やまもと るきや
岩美高校 (2年) 山本 瑠生哉 さん

オートバイの国内最高峰レース「全日本ロードレース選手権」の特別参加枠で、若手ライダー育成を目的に18歳まで参戦できるチャレンジクラスへの出場に闘志を燃やす。



祖父の影響を受け、5歳からオートバイにまたがる。愛車のホンダNSF250Rで、本格的に走り始めたのは中学生のとき。現在、国際ライセンスを持つコーチの指導を受け、週末ごとに県外のサーキットに繰り出す。少しでもタイムを縮めるため、体重が増えないよう食事制限や持久力を付ける筋力トレーニングなど日々の鍛錬にも余念がない。

「将来はケーシー・ストーナーのようなバトルに強いレー

サーになりたい」とはにかむ。そのためには是非でも経験しておきたい舞台。2024年5月の予選会では0.2秒の僅差で、出場条件の基準タイム突破を逃しただけに、同クラスに挑戦できる最後の年に懸ける思いは強い。

当面は、岡山国際サーキットで行われる同選手権第7戦(25年10月)への参戦を視野に、タイムアタックを続ける。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



家族の応援受け 走り続ける

まえた
鳥取敬愛高校 (2年) 前田さくらさん

幼い頃から走ることが好きで、小学5年から陸上競技を始めた。以来、家族に支えられながら陸上に没頭し、2024年夏のインターハイでは女子100メートルで2位に輝いた。



両親の後押しがあり、中学まではクラブチームに所属。クラブがない日も父に練習に付き合ってもらっていた。現在は部活で、高校進学時に立てた1年生でインターハイ出場、2年生で入賞、3年生で優勝の目標に向けて励む。

1、2年生の目標は見事達成。しかし、さなかには1年冬にけが、2年秋に疲労骨折と2度の故障があった。出場を諦めた大会もあり、悔しい思いをした。やめたくなるときもあっ

たが、自己ベスト更新の喜びは何にも代え難く、教員や家族からの声援も励みになった。リハビリ中は自分の走りを一から見直せる良い時間でもあり、来年度の目標に向け、現在も腹筋や背筋を鍛えるなど、今できることに打ち込んでいる。「いつかオリンピックに出場する陸上選手になりたい」。現状に満足することなく、感謝の気持ちを忘れず走り続ける。

仲間と目指す 甲子園の夢

てらくち めいと
八頭高校 (2年) 寺口 芽生跳 さん

「今の仲間と甲子園に出場したい」と、ひたむきに野球に向き合う。キャプテンとして、チームメイトの小さな変化も見逃さない気遣いと高い志で、チームを鼓舞する。



兵庫県豊岡市から親元を離れ、寮で他の部活の生徒と共同生活を送る中で、自立心を養う。家族との別れは寂しく勇気がいったが、甲子園に出場する長年の夢を追いかけるための決断だった。

入学当初は、先輩たちの体格の良さや練習スピードに圧倒されたが、何よりも奥底に秘めた明確な目標と覚悟があったからこそ、長時間の厳しい練習も克服できた。

2年生になり、部員23人をまとめるキャプテンに任命された。持ち前の肩の強さを生かしてキャッチャーを務める。キャッチャーは守備の要で、チームの「心臓部」と自負する。キャプテンとしての責任感も強く、部員の表情や学校生活の様子にも気を配り、時に優しく、時に厳しく声をかける。チームワークの向上を図り、幾多のサインを送ってきたその手でチームを夢の舞台へと導く。

英語力を養い 海外大学へ

倉吉東高校 (2年) 末宗 はるさん

2023年、山陰初の国際バカロレア (IB) 認定校の1期生として入学。イギリスの大学進学を目標に英語力やディベート力を養い、将来のグローバルな活躍に備える。



幼い頃から本を読んで育ち、海外の名作にも触れてきた。特にシェイクスピアの作品が好きで、英文学や戯曲に興味を持つように。高校進学を機に「もっと世界に目を向け、いろいろな考え方に会いたい」と、海外大学の入学資格が得られるIB教育を志願した。

世界水準の学びや探究心、表現力などを育むIBのカリキュラムは肌に合い「大変だけど目標に向けて楽しみなが

ら取り組める」と意欲的だ。アプリでイギリスのBBC放送を聴くなど自主的に学びを深め、英語検定IELTS (アイエルツ) の目標スコア取得を目指す。

2024年10月には希望するイギリスの大学のキャンパスツアーに参加。「多様な人種や考えがあふれていて興味深い。IBでさらに体験を重ね、将来に向けて視野を広げていきたい」と期待に胸を膨らませる。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



鍛錬重ねて 日本一を目指す

倉吉西高校 (2年) 森田 柊馬さん

呼吸を整えて弓を構えると、的をしっかりと見据えて矢を放つ。歴史ある日本武道の一つ、弓道に魅了され、日々の練習で腕を磨く。「目指すは高校日本一」



姉と兄が弓道部だったことで、自然と弓道に興味を持つように。入学すると迷わず入部し、基本動作や礼儀作法などを習得。的に命中させる楽しさを知ると、その奥深さにどっぴりとはまった。「精神統一して自分と向き合う競技。見た目は同じ動作だけど、細かな動きを修正しながら、繰り返し練習した分だけ上達する」

2024年のインターハイでは、男子団体で4位に入賞。全

国の強豪を相手にしのぎを削り、23年の5位から成績は上がったものの「狙うのは優勝だけ」と、常に目指すのは頂点だ。今年のインターハイは中国地方で開催される。うち弓道など5種目は鳥取県が舞台となり、地元出場校への期待の声も高まる。「プレッシャーはあるけど、ホームでしっかりと勝利を納めたい」。的を見定めるようにりんと前を向き、さらに気を引き締める。

全国3冠と世界舞台見据え 鍛錬を積む

鳥取城北高校 (2年) 岡本 成世さん

団体競技が多いローイングの中で唯一の個人種目「シングルスカル」。全国3冠とU-19日本代表になった姿をイメージし、ストイックに自分自身と対峙する。



小学5年の時に参加したジュニアアスリート発掘事業がきっかけ。競泳で鍛えた心肺機能と、身体能力の高さで頭角を現し、中学3年時には全日本中学選手権で優勝。競技にはまった。

高校ではかじ付き4人スカルにも取り組んだが、「一人で漕ぎ切ったときの達成感が最高」とシングルスカルに戻し、2024年のインターハイ、国民スポーツ大会で頂点に立った。

目下の目標は全国選抜のタイトル。達成には「体力面」を課題に挙げる。昨季のU-19日本代表選考レースでは、トップ集団を形成しながら終盤失速し、上位7人の代表枠に届かず11番手に終わった。全国選抜と同じく2千メートルレースだった。「最後まで勝負ができる体づくり」を基本に普段の練習から改善点を見つけ、納得するまで鍛錬を積む日々。三つ目の日本一と雪辱となるU-19選考レースを見据え、さらなるレベルアップを誓う。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



競技かるた 昇段を目指す

青翔開智高校 (2年) 池谷 優那さん

本年度から競技かるた部部長に就任。2024年夏の大会では個人戦でブロック準優勝をつかみ取り、かるたへの情熱が高まった。次なる昇段に向け、まい進する。



老若男女問わず楽しめる「量の上の格闘技」、競技かるた。歌人の思いや、和歌が生まれた景色に想像を膨らませ、さまざまな読み取り方ができ、「生まれた時代は違うけれど、詠んだ人と同じ風景が見えるところが魅力」と目を輝かせる。

部長として、鳥取大のサークルや鳥取万葉かるた会などとの練習試合を企画したり、新しい基礎練習法を考案した

りと、日々奮闘する。毎日インターネットでトップ選手の動画を見て勉強するなど、個人の努力も欠かさない。

最近では、かるたを通して人とのつながりが広がっていくことが楽しい。「さまざまな場所に足を運んで、多様な価値観に触れてみたい。競技かるたという日本ならではの文化を糧に、グローバルに生きていけたら」と将来を見据える。

最後の一秒まで諦めない

鳥取中央育英高校 (2年) 堀本 泰治 さん

「強くなりたい」という思いで飛び込んだレスリングの世界。放課後の道場で本番さながらのスパリングを繰り返し「やるからには五輪で金メダル」と闘志をみなぎらせる。



中学で打ち込んだ柔道から転身したのは二つ上の兄の影響。幼い頃から憧れの存在だった兄がレスリングを始め「そばで応援しているうちに挑戦してみたくなった」。以降すっかり没頭した。

指導を仰ぐのは全日本選手権で3連覇、アジア選手権3位の記録を持つコーチ。「まさに大きな目標で、人間的にも学ぶことが多い。練習はきついけど、しんどい思いをした分

だけ本番が楽になる。どんな試合でも最後の一秒まで諦めない」。2024年は県総体で個人競技2冠という快挙を達成。グレコローマンスタイルでは階級を上げて挑み「筋肉量が段違いの選手ばかりで圧倒されたけど、自分らしい試合ができた」と笑顔で振り返る。25年は最後のインターハイと国民スポーツ大会が控える。「練習でしっかり体力を付け、自信を持って臨みたい」と闘志を燃やす。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



サッカー通じ人間的に成長

倉吉北高校 (2年) 西口 晴流 さん

スポーツ少年団をきっかけに始めたサッカー歴は丸10年。「チーム一丸となってゴールを狙う醍醐味、そしてメンバーがつかないで勝ち取る『1点の重み』を大切にしたい」



中学時代、琴浦町で発足したサッカークラブの初代キャプテンを務め、主体的に動き、声を上げてチームの士気を高める役割を担った。「試合中や練習の苦しい時こそモチベーションを上げるために声を張り上げる」。その精神は高校でさらに養われ、チームのかじを取るボランチとして活躍しながらチームを盛り上げる。

2023年、部員増強で単独チームを形成し、わかとりリリー

グに初参戦。24年は2部リーグから1部への昇格を決めた。多くのスポーツで名声を誇る学校だけに「サッカーでも実績を挙げたい。今年は全国高校サッカー選手権大会の県大会で優勝し、全国大会に出場したい」と熱がこもる。

将来は、チームワークで培ったコミュニケーション力やスポーツマン精神を生かし、社会貢献できる人。になるのが目標。「サッカーで人としても成長したい」と前を向く。

伝統ある太鼓の響きに心酔

倉吉農業高校 (2年) 天野 李香 さん

放課後、力強い和太鼓の音が校内に響き渡る。「みんなでフリを合わせて打つのは楽しい」。創部30年の歴史ある倉農太鼓部で、仲間とともに息を合わせてパチを振るう。



鳥取県内の高校で唯一の和太鼓専門部。部活動紹介で先輩が披露した迫力ある太鼓の音に心が震え「自分も格好良い演奏で見る人を魅了したい」と入部を希望した。

練習は週4回の部活のほか、自宅でも床や膝をたたいて基礎となるリズムや強弱の付け方を体で覚える。始めた当初より上達したとを感じるものの「まだまだ練習が足りない。全身運動で体力もつけないと」。向上心は尽きない。

2024年夏には岐阜県であった全国高校総合文化祭に出場し、大勢の観客を前に演奏。「緊張したけど部員みんなでやりきった」と爽快地語る。そして、全国の強豪校から刺激も受けた。「課題はパフォーマンス。ダイナミックな動きを取り入れることで迫力が増す。全員で音と動きをそろえられるよう頑張りたい」。仲間と共に今日も練習に励む。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



カヤック競技で自己記録更新

倉吉総合産業高校 (2年) 牧田 将伍 さん

身長を超えるパドルで素早く水をかき、勇壮に船を滑らせる。「風を切って水上を進むのは爽快。もっとスピードアップし自分の世界を広げたい」。船上で笑顔がはじける。



カヌーとの出会いは小学6年。体力を付けるため地元のクラブチームに所属し、初めてカヌーを体験。腕の力だけで進むイメージだったが「踏ん張るために下半身の筋力も重要。実は全身運動のスポーツ」と力を込める。小中と全国大会にも出場し、経験を積んできた。

高校ではカヌー部で本格的にカヤック競技に向けたトレーニングを開始。仲間たちと日々、東郷池で練習に打ち

込む。2024年はインターハイ、国民スポーツ大会とも上位に食い込めず、悔しい年となった。

目指すのは500mで1分48秒台のタイムを出すこと。現在の自己ベストを10秒以上も縮める高い目標で自身を鼓舞する。「冬の間にしっかりと体力づくりに専念してきた。その成果を発揮したい。まずは3月にある日本代表選手選考会に出場し、世界選手権への切符を手にしたい」

かるたを通じて 広がる世界

米子西高校 (2年) ^{うしの あい} 牛野 愛唯 さん

映画「ちはやふる」を見て、「かっこいい！私もやってみたい」と始めた競技かるた。百人一首を通じて多くの人との出会いやつながりが生まれ、新たな景色が広がった。



「ちはやふる」は、競技かるたに打ち込む高校生たちの物語。米子西高では有志で活動しており、現在は3人で練習に励む。競技かるたは、記憶力や集中力、札を取る速さなど、さまざまな力が問われる。試合は札を取り合う激しい側面もあるが、一対一で相手と向き合うことで、「人とのつながりや自分の成長を感じられる」と話す。

好きな札は、自分の名前の文字で始まる「あい見ての後

の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」。より早く、最短距離で札を取るための動きや態勢を動画などで研究し、2023年の中国大会で4位に入賞するなど、県外の大会での実績も重ねつつ、最上位のA級を目標に腕を磨く。

身近に切磋琢磨できる仲間がいることも大きな力になっている。「これからも、かるたを楽しむことを大事にしたい」と笑顔で話す。

歌うことで 感動を届けたい

湯梨浜学園高校 (2年) ^{えんどう らいと} 遠藤 礼都 さん

「いろんな人の歌声が一つになって心地良いハーモニーが生まれる。その魅力を多くの人に届けたい」。合唱部の部長としてまとめ役を担いつつ、自らの歌声磨きに余念がない。



1年の時、NHK全国学校音楽コンクール(通称Nコン)に指揮者として出場。当時まだ合唱部には所属していなかったが、ピアノの腕前から音楽的センスを見込まれ、顧問教諭の大抜てきを受けて登壇。会場で体感した全国の生徒たちの生の歌声に感動し「歌ってすごい！自分も歌ってみたい」と即入部を決めた。

本格的に声の出し方や歌い方の指導を受けると、歌唱力

はめきめきと上達。パートはバスを担当し、部員らと共に声を合わせて歌う楽しさを実感。2024年は歌手としてNコンの舞台に立ち、大ホールに歌声を響かせることができた。「上位入賞には至らなかったけど、貴重な経験ができて、全国の素晴らしい合唱を聴くことができた。これからも楽しみながら、合唱を通して得た絆や責任感を将来に生かしていきたい」と目を輝かせる。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



さまざまな舞台で 挑戦！

米子高校 (2年) ^{だ て まなみ} 伊達 愛美 さん

演劇で県大会、3年連続の中国大会出場を目指し、表現力を磨く一方、部長として「みんなのお手本になれるように」と、部活動に限らずさまざまな挑戦を続ける。



人前で話すことが好きで演劇部へ入部するも、伝える難しさに直面した。以来、表現力向上のため、何気ない日常生活の一コマに気を配り、言葉の背景にある感情の理解に意識を向ける。部長に就任し、部員を束ねるため「自身が頑張る姿や行動で示す」と決めた。挑戦することには前向きな性格。10年ぶりに鳥取県で開催される「近畿高等学校総合文化祭(近畿高総文祭)」の大役・実行委員長への立候補も

その一つだ。「実行委員メンバーの得意なところを引き出し、良い大会にしたい」

2024年に50周年を迎えた米子がいな太鼓は小学4年から継続。「米子で暮らす温かさを覚えた」。感謝を忘れず、伝統の重みを感じながら、活動への気持ちを新たにしている。

演劇、近畿高総文祭、米子がいな太鼓一。挑戦中のどの舞台でもさらに精進を重ねるつもりだ。

世界を視野に 努力を重ねる

米子東高校 (2年) ^{ふなざわ なな} 船澤 奈菜 さん

高校生からセーリングを始め、2024年国民スポーツ大会セーリング競技・少年女子ⅠLC A 6級で優勝。学業との両立を図りながらワールドカップ出場に思いをはせる。



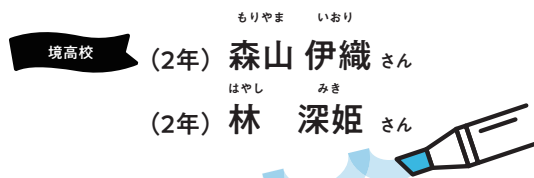
中学時代はローイングに親しみ、ジュニアアスリートにも選出。高校生になってからセーリングに転向し、昨夏の国民スポーツ大会で全国制覇を果たした。

1レースが40分に及ぶフィジカルの強さが問われる競技だが、「全身を使うのはもちろん、風や潮の流れを読んで作戦を練り艇を操るので、頭も常にフル回転している」と楽しそうに話す。

境港を拠点に活動する、東京五輪に出場した瀬川和正選手に技術面のアドバイスを受けて「世界」を意識するようになった。

技術の向上に力を注ぐ一方、「規則正しい生活をしていないと、体の異変に気付けない」と周囲の協力を得ながら、体調面にも気を配る。「目標はワールドカップ出場！」

セーリングで頂点目指す



高校入学後にペアを組み、2024年は国内の大会で次々に優勝、日本代表として世界大会にも出場した。「セーリングで日本一、世界一」を目標に、さらなる飛躍を誓う。

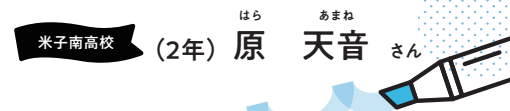
好成績の理由は、コーチの熱心な指導や恵まれた練習環境。境港公共マリーナを拠点に美保湾で練習を重ね、技術やコンビネーションを磨いてきた。24年はイタリアとスロベニアでの世界大会に出場し、世界で戦う手応えもつかんだ。来季はインターハイと全日本選手権の連覇に加え、国民スポーツ大会での優勝も目指す。

森山さんは小学6年、林さんは中学3年でセーリングを始



めた。「海との距離の近さ、風を切って走るスピード感」が魅力と話す。風を読んでコースを見極め、息を合わせてヨットを操る。「性格は真反対」という2人だが、森山さんの経験値と林さんの冷静さが海の上で大きな力となる。競技経験を重ねて視野も広がった。将来は「スポーツに関わる仕事に」(森山さん)、「英語を勉強して海外へ」(林さん)と夢を描く。

目標に向かって日々努力



高校からアーチェリーを始めた。あいさつと礼儀を大切にし、自分の実力を高めながら、仲間と中国大会に出場することを目標に、日々練習に打ち込む。

高校生になったら新しいことを始めてみたいと思っていたところ、中学でお世話になった先輩がアーチェリー部に在籍していて興味を持った。「部員それぞれの目標を把握し、切磋琢磨できるところが魅力」と語る。

部活では、試合形式の練習で記録をノートに残し指導者からの狙い方や矢を放つときの助言をもらい、すぐに行動に移すようにしている。風向きやコンディションなどで矢



を射る一連の流れが変わるためメモを取り、状況を把握することで自身と向き合うようにしている。練習後は部員で反省会を行い、自分では気付かなかったところを確認し、指摘し合うことで、上達につながっている。

アーチェリーは礼節を重んじる競技で、日頃の生活にも良い影響を与えている。将来は「学校の先生になってアーチェリーを広めていきたい」と考えている。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。

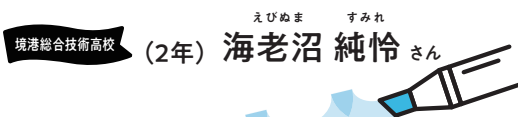


輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



日々の鍛錬で心と体を鍛える



中国新人選手権の砲丸投げで入賞。「1秒でも記録を伸ばし、自己ベストを更新する！」と固い決意を持って、日々厳しい練習も笑顔で技術向上に励む。

中学1年で短距離から始めた陸上競技。「陸上＝走る」というイメージだったが、足の故障でタイムが伸び悩む中、投てき種目の先輩が練習に励む姿に憧れて始めたジャベリックスローで、その面白さを知った。

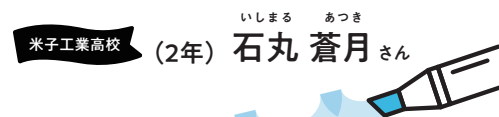
専門の指導者に出会い、中学2年から始めた砲丸投げは、簡単そうに見えたものの、瞬発力、筋力、投げ方の工夫などさまざまな要素があり、奥の深さに魅力を感じている。



肩の力を強化するため、母親の作るタンパク質豊富な食事 で体をつくり、メディシンボールや筋トレなど、「自分なりのペースを守ること」を重視して日々計画を立てた練習で力を付けている。

将来の夢は保育士。「人の良いところを見つけ、良いところを伸ばすことができる人間になりたい」と勉強と部活の両立を心がける。

仲間と共に全力プレー



高校で始めたラグビー。その魅力は「仲間と共に全力で闘うことができる場所」。日々心身を鍛え、技を磨き、花園(全国高校ラグビー大会)出場に挑む。

興味を持ったきっかけは、ラグビー日本代表の活躍だった。父がラグビー部OBという縁もあり、先輩の声かけで入部を決めた。ポジションはフルバック。自陣の「最後のとりで」として、キック力やスピード、パスの技術など幅広い能力が求められる。日々の練習では課題となるプレーを重点的に行うほか、持久走や筋トレなどで鍛錬に努める。

仲間のために闘う精神、トライを決めた時の達成感、幅



広い人間関係などラグビーを通じて得たものは多い。「コベルコカップU18」の中国ブロック代表に選ばれたことも成長の糧となった。

現在の部員数は7人で、花園の切符を懸けた大会には県内の合同チームで挑む。「単独チームで出場できるように仲間を増やしたい」とラグビーの楽しさを伝えることにも意欲的だ。

ドローンサッカー 全国一へ

米子北高校 (2年) 傘井 奏 さん
まつもと きょうしろう
(2年) 松本京史朗 さん

小型のドローンボールを操り、5対5で得点を競うドローンサッカー。全国優勝を目指して技術やチームワークを磨きつつ、地域での普及活動にも貢献し、楽しさを伝える。



学校生活の充実を目指す新たな部活動の一つとして、2023年10月にドローンサッカー部が始動。日本ドローンサッカー連盟鳥取・島根支部の協力で練習している。2人は活動を知り、「面白そう」と入部。当初はドローンの操縦に苦戦したが、今では1分間に10回以上ゴールを通過できるまでに上達した。

試合では相手の動きを封じて味方をアシストするなど、

チームワークや戦略も問われる。部活動としてはまだ全国的に数が少なく、大会には幅広い年代が出場する。地域での普及活動にも参加し、学校内外でのコミュニケーションが広がった。

部の歴史は始まったばかり。「強さと優しさを兼ね備えたチームでありたい」(傘井さん)、「地域の活動にも積極的に参加していきたい」(松本さん)と、目標を掲げる。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



仲間と共に ソフトテニスに熱中

日野高校 (2年) 佐々木 空大 さん

チームの仲間と共にソフトテニスに熱中し、心身ともに充実した日々を過ごす。中学時代にやっていた野球の経験を生かしてさらなる高みに向かう。



友人に誘われ、高校からソフトテニスの道へ。日々、顧問からアドバイスをもらいながらチームメイトと練習に励む。試合に勝ったことがきっかけとなり、ソフトテニスの面白さや奥深さにあらためて気付いた。

プレーヤーとしてもっと「上達したい」「強くなりたい」と普段の部活動に加え朝練や休日練習に取り組み、ランニング、スクワットや腕立てなどの地道なトレーニングにも力を

注ぐ。一方、テニスに熱中できる環境があることに対する周囲への感謝の気持ちも忘れない。

「これからの大会や試合に向けて自分自身をもっと追い込み、他の選手に負けないように頑張りたい。結果を出すことで、新しい仲間が加わり団体としても出場できるようになればうれしい」と目を輝かせる。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。



銃剣道 全国2連覇目指す

米子北斗高校 (2年) 糸原 心温 さん

2024年夏の全国銃剣道大会で、逆境をはねのけて優勝。得意技は「出鼻」と「剣上」。「小・中・高で優勝する」という目標を達成し、今年は大会2連覇が視野に入る。



木銃で相手の左胸部や喉をついて勝敗を競う武道・銃剣道をしている自衛官の父の姿を見て憧れ、指導者でもあった父からの誘いで、小学3年から競技を始める。始めた頃は「腕の筋肉がついていなくて、木銃が重たくて支えるのが大変だった」そうだが、小学4年で初めて出場した全国大会で3位に入った。

めきめきと力が付いているのは「父の指導のおかげ」と

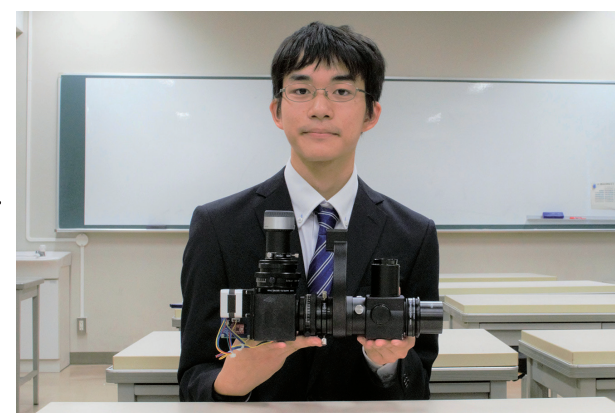
きっぱり。競技人口が少なく、同世代の選手との練習が難しい中で「日常的に技術的なアドバイスがもらえるのが大きい。練習のない休日でも、『練習がしたい』と言えば、いつでも付き合ってくれる」と感謝を忘れない。

部活動は剣道部に所属し、銃剣道と両立して日々練習に励む。今後も銃剣道を続けたい気持ちが強く「銃剣道をもっと多くの人に知ってほしい」と願う。

将来は宇宙開発に 携わりたい

米子高専 (4年) 吉田 浩瑛 さん

科学部で天体の温度や密度など物理的状態などを知るための観測に用いる装置・分光器の開発リーダーを務め、国際大会で入賞。設計したものが形になる面白さに魅了された。



小学2年生頃から天文分野に興味を持ち、日本宇宙少年団鳥取アストロ分団の団員として「さじアストロパーク」で活動していたこともある。米子高専入学後は天文関係の研究に力を入れている科学部に入部。小型のものでも約100万円と高額な既製品は国内の天文台であまり導入が進んでいないことに着目し、竹内彰教授指導の下、新たな天体観測用分光器の開発に取り組んだ。

その活動が評価され、米ロサンゼルス開かれた世界最大級の高校生の科学技術コンテスト「リジェネロン国際学生科学技術フェア2024」の物理学・天文学部門で優秀賞(4等)を受賞した。分光器の魅力について「星空を観察するだけではなく、天体の状態を学術的に解析できるところ」と語る。科学部を引退した現在、「宇宙開発の仕事に携わりたい」と日々勉学に励む。

体操を通じ 技と人間力磨く

きたじま ゆうな
米子松蔭高校 (2年) 北島 優風 さん

幾度もの失敗や怖さを乗り越え、時に数カ月かけて一つの技を完成させる。体操を通じ、選手としての実力だけでなく「人を支えられる存在に」と人間力を磨く。



体操を始めたのは幼稚園の頃。高校で本格的に頑張ろうと決め、兵庫県から進学した。インターハイには個人で2回出場し「昨年の自分を超えたい」と全力で練習に取り組む。

女子の体操は、跳馬、段違い平行棒、平均台、床運動の4種目。現在は、平均台で後方倒立回転とび(バク転)を2回連続で行う技を練習している。平均台は高さ125センチ、幅10センチ。怖さもあるが、それだけに「できたときの喜びは大き

い」。

「私は部長でもなければ、特別上手なわけでもない。だからこそ、親しみやすく何でも話せる存在になりたい」と日々努力する。けがも経験し、治療やリハビリを受ける中、スポーツ選手を「支える人」の重要性を実感した。「人を多様な面から支え、頼られる人間になりたい」。将来の夢はアスレティックトレーナーになること。

輝く高校生・高専生インタビュー

鳥取を舞台に輝く若い力。
未来をみつめ、がんばる高校生・高専生を紹介する。

